かたりべ 24・25

合併号

豊島区立郷土資料館だより

旧取水口付近で講師の説明をうける参加者

水辺探索フィールドワーク

昨年の一〇月から一一月の日・祝日の五日間を使い、当館では「水辺探索フィールドワーク**〜千川上水を歩いて・見て・記録する〜**」を実施いたしました。

今回は、一回のオリエンテーションと四回のフィールドワークで、毎回三〇名にものぼる参加者を見ることが出来ました。

この四回の中で、全長約二二キロメートルの千川上水を歩いたため、かなりの強行軍になりましたが、参加者のみなさんは、熱心に講師の先生の話に耳を傾け、自分の目で確かめつつ、ペンを走らせていました。

現在千川上水流域には、そこに水が流れていたことを示すものは、ほとんど残っていません。しかし、注意深く見ると路上（マンホール）や路傍（千川上水の境界を示した石）に、千川上水に関係する様々なものを見つけることができるのです。

また、このフィールドワークの成果は、一九九一年度冬期特別展「**千川上水展**〜うつりゆく流域のくらしと景観〜」にも積極的にとり入れ、展示を見たあとに、見学者の方々が地図を片手に歩けるように、現在の変わってしまった景観写真なども展示してあります。

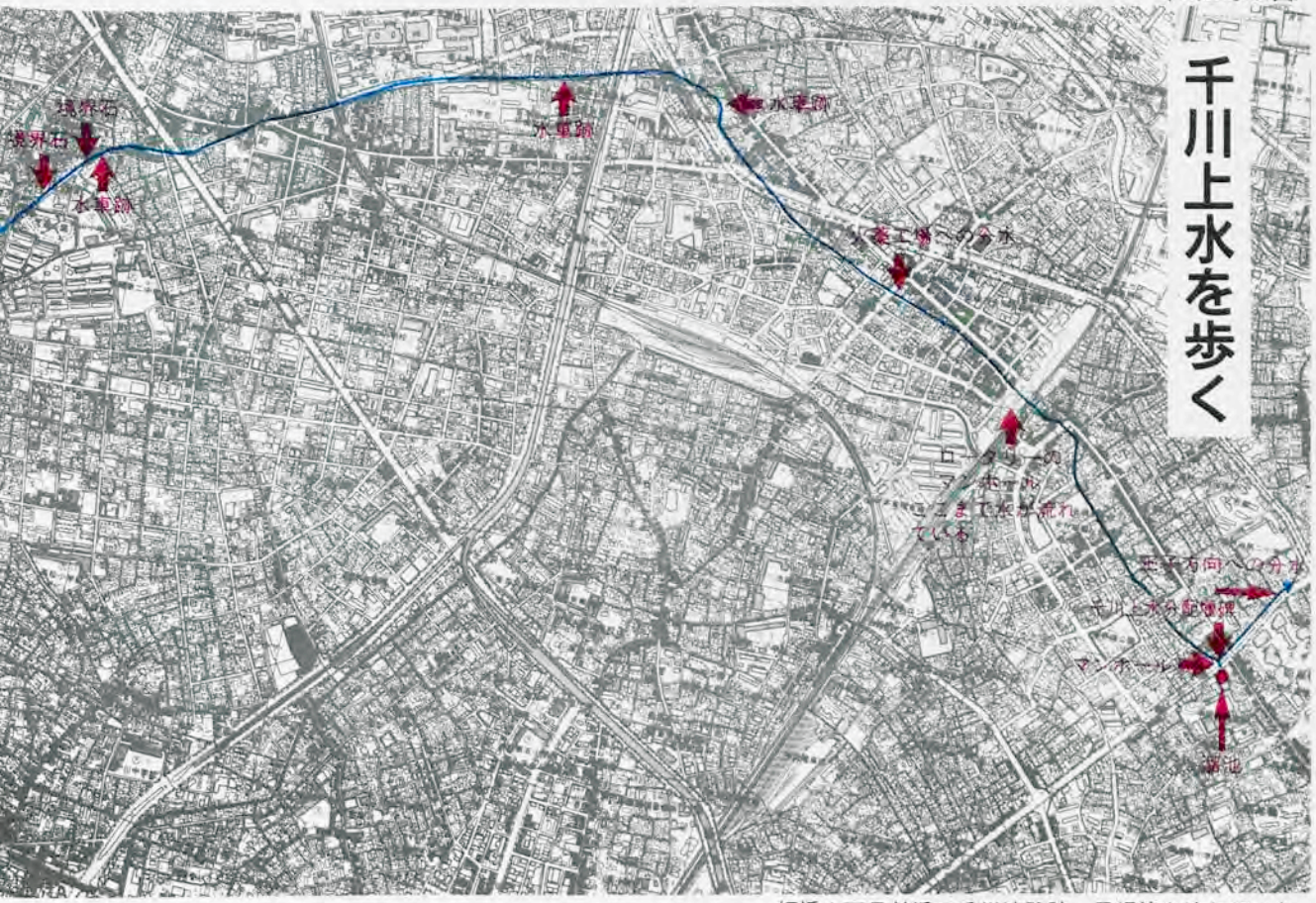
千川上水を歩く

巣鴨の千川上水公園から流路を遡ってみましょう。

千川上水公園の、かつて溜池があった場所には、バルブのハンドルが残っていますし、公園の明治通りを隔てた向かいには「千川上水分配堰」と刻まれた碑が建っており、そのすぐ近くに、「千川上水」の文字を図案化したマンホールがあります。

地図で見ると、板橋駅の手前は少し湾曲していますが、「千川上水路図」をみると、そこには水車があったようです。↘

千川上水公園



板橋1丁目付近の千川流路跡、尾根筋を流れていた

↘板橋駅のまえのロータリーにあるマンホールの下には、今でも玉川上水から分水された水が流れています。

板橋駅を過ぎたあたりの流路は、道の両側が低くなっていて、千川上水が尾根筋を流れていたことがわかります。

そのまま進んで中山道を渡り、対岸を百メートルほど進んだところで裏道に入ると水車があった場所があります。

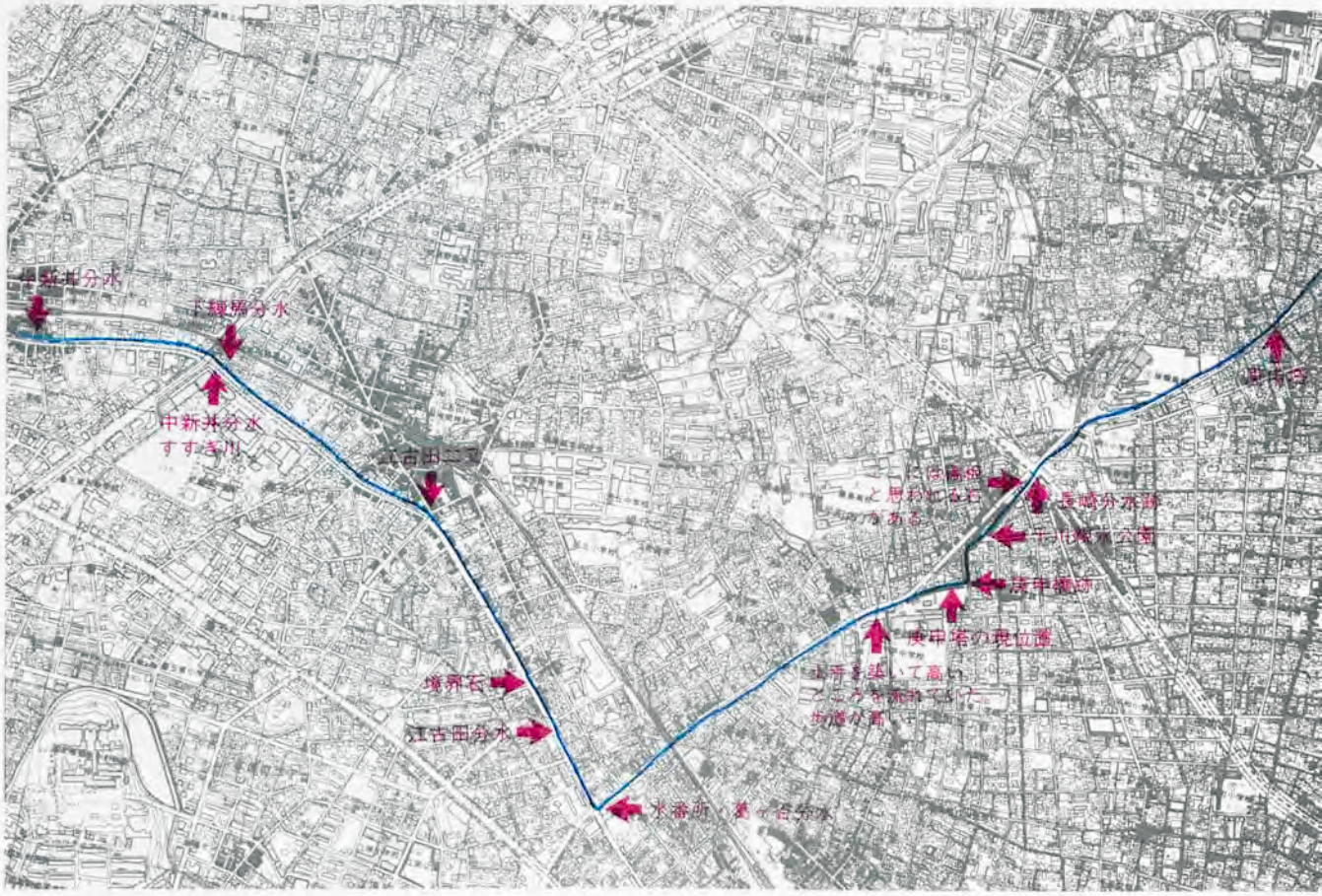
そこから板橋区役所の右の道を大山方面へ進むと、繁華街を抜けて川越街道へ出ます。

川越街道を渡ってしばらくは、千川上水の流路は道路ではなく、病院を過ぎたあたりから再び道路となります。

板橋交通公園の手前の大山西町の流路沿いには千川上水の境界石があり、フラワーボックスのある道を進むと、大谷口一丁目の豊島区境の庚申塔がある交差点にでます。

その道を進んだ千川小学校の先の狭い道が千川上水の流路で、そこを過ぎると谷端川に注ぐ、長崎分水があった要町三丁目の交差点にでます。

長崎５丁目付近、土手の上を流れていた



要町三丁目の交差点を渡ったあたりから桜の木が植えられている千川親水公園が始まり、その手前には、付近の橋に使ったと思われる石があります。

先へ進むと、庚申橋があった角にでます。庚申塔などがあった場所は現在ゴミの集積場となり、石仏は少し上流に移されています。

その先に千川小学校の前の一メートル程高くなっている歩道がありますが、ここは千川上水が、土手を築いて高くした所を流れていたことをしめします。

西武池袋線を過ぎた先の、明治乳業のある交差点で、練馬区方向にほぼ直角に曲がりますが、ここには昔、水番所がありました。

ここを右折すると、江古田二又にいたりますが、その途中にも千川上水の境界石があります。

旭丘一丁目の路傍、境界石が残されている

江古田二又から千川上水は、上流に向かって道の右側を流れます。

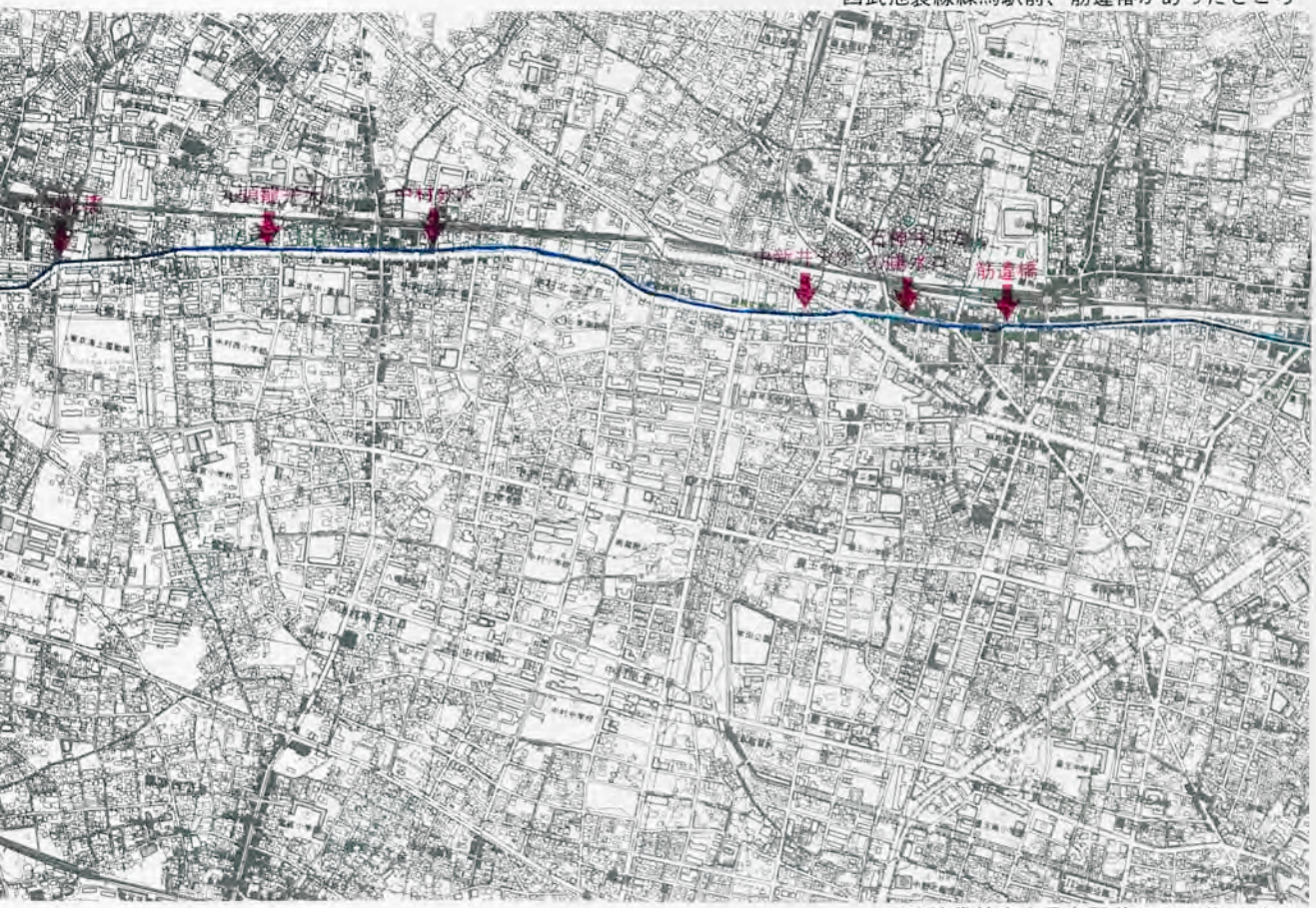
その上流の桜台陸橋付近には二本の分水が南北にのびていました。北川にのびるのが下練馬の分水で、南側にのびるのが中新井村北新井分の分水です。

現在、中新井分水は濯川として、武蔵大学の構内に流れています。

その上流の練馬消防署の付近にも、かつて水車がありました。

そして、練馬の駅前の筋違橋の所で左側に移ります。

西武池袋線練馬駅前、筋違橋があったところ



西武池袋線富士見台駅前の九頭龍橋付近

その後、目白通りの交差点を過ぎたところから再び右側に移ります。

交差点を過ぎて八〇メートル程行ったところの駐車場の脇の細い道が中新井村への分水口と思われます。

中村北三丁目の信号付近にも、南へ注ぐ分水口がありました。

また中村北四丁目付近の道路と歩道をわける植え込みのなかには、九頭龍弁天があります。

そして、現在の富士見台五差路には、九頭龍橋が架かっていました。

富士見台一丁目四番地付近にある千川児童遊園には、かつて鴨下水車がありました。その先の左側には、育英工業専門学校があり、その敷地が終わるあたりで千川通りを横切る道の右側に「右長命寺道」の道標があります。

この道標は、一九四〇年に武蔵高等学校の生徒らによる調査の際に写真に撮られています。

そこを過ぎて、環状八号線の少し手前の交差点に架かっていたのが八成橋で、その付近に斉藤水車がありました。

この斉藤水車は、付近のひとびとにはハチナリ(八成)水車と呼ばれていました。

その水車は、水輪の直径が七メートル以上もあるものでしたが、当時千川上水にかかっていた水車には、このくらいの大きさのものがいくつかありました。

「右長命寺道」とある道標

ハチナリ水車を過ぎて、環状八号線を過ぎても、千川上水はほぼ直線に流れています。

下石神井一丁目にあるマンションの鉄柵の中には、千川上水が開鑿(かいさく)されたのとほぼ同じ時期（元禄九年）の銘のある庚申塔があります。

西武新宿線の上井草駅方面に進んだ下石神井四丁目九の付近が東京同潤社糸線器械工場の跡地です。

この東京同潤社は、東京都公文書館所蔵の「千川上水路図」にも記されており、同図の作成年代の推定材料になっています。

そこを過ぎると、西武線の踏み切りへと到ります。この踏み切りを境に、千川上水はS字状に曲がっていて、踏み切り敷設のときに、流路を変更させたことをうかがわせます。

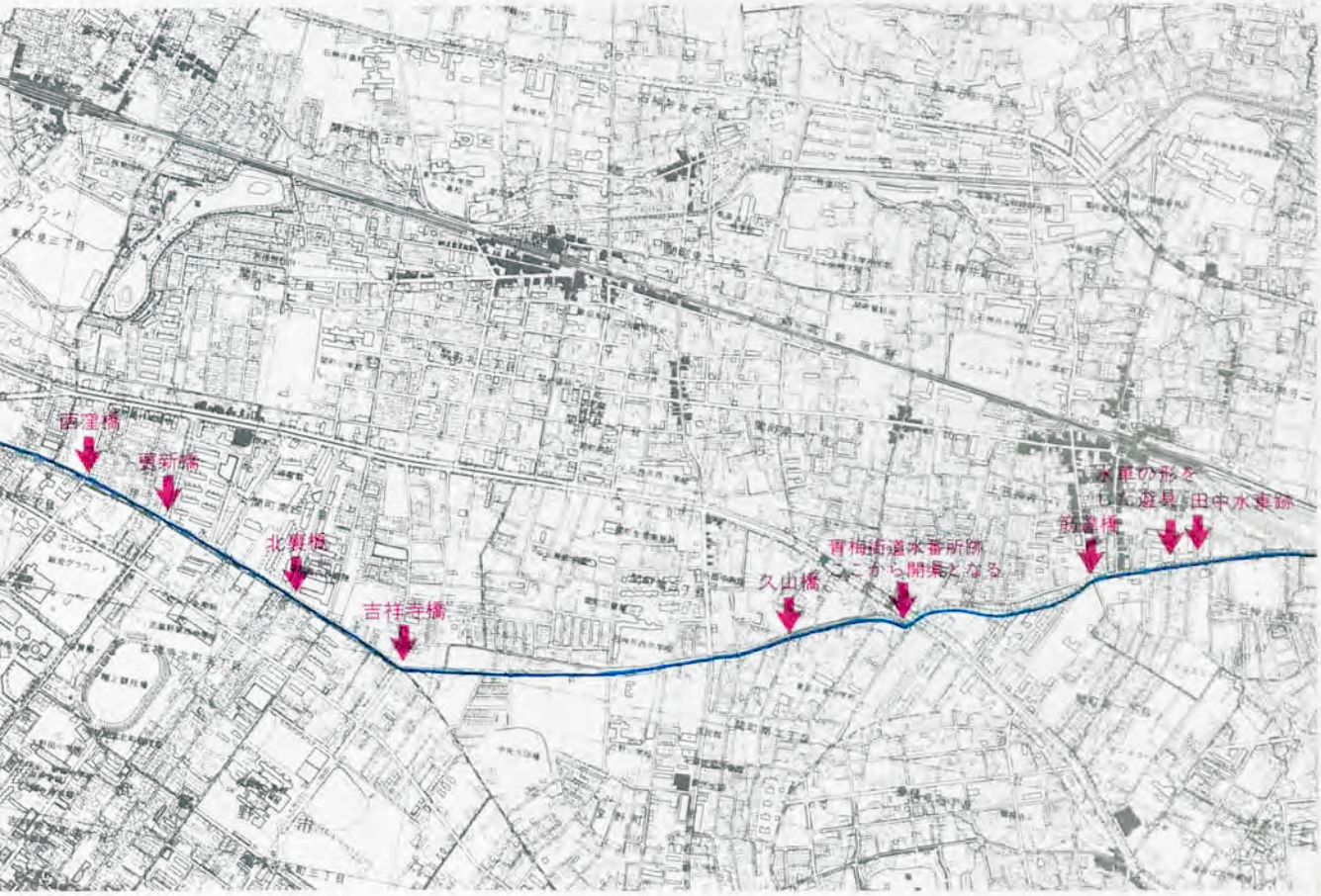
西武新宿線と交差するところ

西武新宿線の踏み切りを横切った千川上水は、水車の形をした遊具がある上石児童遊園のあたりで左側へうつり、千川通りと平行した緑道の中に入り、青梅街道にいたります。

青梅街道を渡った千川上水は、ここから取水口付近まで開渠となっており、水の流れを見ることができます。

さらに遡ると、吉祥寺通りとの交差点には「取水口まで四・五キロ」という表示があり、清流復活の看板などを見ることができます。

青梅街道との交差点



青梅街道より上流の開渠となっている部分には、多くの橋が架かっています。

下流から上流に向かって歩いて行くと、千川橋(踏)・久山橋・吉祥寺橋・桂橋・北裏橋・更新橋・西窪橋などの橋が架かっています。

吉祥寺橋の東側には、小金井道・青梅街道・吉祥寺停車場・井之頭道という道標を兼ねた千川上水施餓鬼亡霊供養塔があります。

また、更新橋付近には、三郡橋付近にあった、やはり道標を兼ねた庚申塔があります。

更新橋や西窪橋の付近の南側は中島飛行機製作工場の跡地で、戦争中はこの橋を利用して、部品の搬入が行われていました。

このあたりは、幹線道路からも離れ、静かなたたずまいをみせています。

三郡橋

西窪橋からさらに上流に進むと、三郡橋・関前橋・千川橋・葭窪橋・鎮守橋・柳橋・境橋と続いて玉川上水からの取水口に到ります。

三郡橋は、新座郡・多摩（北多摩）郡・豊島（北豊島）郡の三郡が接している場所に架かっています。

関前橋の付近から、道が広くなり、千川上水は水流を覗かせたまま、道の真ん中を流れています。

この付近になると、交通量も多くなって、静かな散策というわけにはいきませんが、流路は整備されています。

その上流には千川橋があり、近くには武蔵野市立千川小学校があります。

このように、千川上水は上流から下流まで、付近に住んでいるひとびとにとって、非常に親近感のある存在であったということがいえるでしょう。

関前橋

千川橋の上流の五日市街道と合流する交差点には、一七八四（天明四）年に建てられた、高さ二メートルの庚申塔があり、この五日市街道付近には、他に庚申塔や石橋供養塔、忠魂碑なども見ることができます。

武蔵境へ向かう道と交差する所が柳橋で、そのまま遡ると玉川上水からの分水口のある境橋へと到ります。

現在は、この地点から、一日に約一万トンの水が、千川上水へ分水されています。

しかし、実は、その玉川上水の水も多摩川の水ではなく、多摩川上流処理場からポンプで圧送されてくる、下水処理水なのです。

玉川上水を少し上流へ向かうと、旧分水口の跡があり、現在でも水量調節のハンドルが残っています。

旧取水口の様子

豊島区立郷土資料館刊行物のお知らせ

☆郷土資料館調査報告書7

◎『**豊島の集団学童疎開資料集(3)日記・書簡編Ⅲ—長崎第二国民学校（その1）—**』

第二次大戦末期、空襲を逃れて豊島区長崎第二国民学校（現・要町小学校）から山形県のお寺へ疎開した六年女子の日記。家の事を考えて床の中で泣いた夜、「こんなことでいいか、……私達は自分の家をなつかしがる為に疎開してきたのではない」と自分を叱ってみるが、「でも時々家を思い出してぼんやりしてゐる」。少女の戦争観とその動揺を伝える。（一七〇〇円）

☆郷土資料館調査報告書8

◎『**中世豊島氏関係史料集(2)　豊島氏編年史料Ⅰ**』

豊島区にゆかりの中世領主、豊島氏に関する史料集。前刊の『豊島・宮城文書』に続いて、今回は平安時代から室町時代の武蔵豊島氏滅亡までの全国各地での豊島氏とその一族の動向を示す史料二三〇点余を調査・収集して掲載した。それぞれの時期における各地の豊島氏の活躍の様子が描かれる。参考史料として源姓豊島氏や九州の豊島姓一族の史料も収録。（一六〇〇円）

☆郷土資料館収蔵資料目録　第五集

一九九〇年度に実施した池袋地区の歴史生活資料所在調査の結果収集された、文献資料約五〇〇点余の目録、および「豊島区集団学童疎開関係資料目録Ⅱ」として、聞き取りテープのリストを中心とした目録を収録。（一〇〇〇円）

☆郷土資料館研究紀要・年報

◎『**生活と文化　第六号**』

郷土資料館の新館設立準備をむかえ「新館設立にむけて」という特集を組み、郷土資料館運営委員の方々にご執筆をいただいたものを収録する。

そのほかに、「後北条領国下における番匠の存在形態」、「私立池袋児童の村小学校に関する二、三の考察」、「戦争体験継承講座の課題と展望」、「高度経済成長の『教祖』・下村治理論の解剖」の四つの研究論文を掲載する。

また、巻末には、一九九〇年度の資料館活動をまとめた年報を収録した。（八〇〇円）

編集後記

今回のかたりべは、24・25号の合併号として紙面を増やし、冬期特別展「**千川上水展**～うつりゆく流域のくらしと景観～」にあわせて、「千川上水を歩く」という特集を組んでみました。

この冊子が、千川上水の流路を歩く時の、参考になれば幸いです。

＊　＊　＊

郷土資料館では、今年の特別展（仮称）「としま60年のあゆみ」のため、豊島区内の景観や風俗などを写した古い写真を募集しております。昭和六〇年代頃までの写真や地図などがございましたら当館までご連絡下さい。

＊　＊　＊

冬の特別展の終了に伴う展示替えのため、三月三〇日（月）から四月六日（月）まで展示室を閉鎖いたします。ご了承下さい。

かたりべ
・
No.24・25合併号
・
1992年3月20日
発行
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話03-3980-2351